

普段使いに設計された ミュージアム

府中市・川崎市・八王子市の3つの現地事例から、
展示だけに依存せず、日常の行動から文化とつながる施設設計を読み解く。



左：府中市郷土の森博物館 中央：かわさき宙と緑の科学館 右：桑都の杜 / 写真：ArtTech Consulting

2026.10 / MUSEUM STUDY 02

IT Business × Art × Strategy

はじめに

「展示を見に行く」から、 「文化のある場所で過ごす」へ

ArtTech Consultingでは、美術館・博物館・科学館などを実際に訪問し、展示内容に加えて、来館者体験、施設運営、地域との接点、IT・デジタル活用について調査しています。本レポートは、現地訪問に基づく3本の「ミュージアム研究」を再編集したものです。

取り上げるのは、**府中市郷土の森博物館**、**かわさき宙と緑の科学館**、八王子市の複合公共施設「**桑都の杜**」。規模・設置方法・提供サービスは異なりますが、いずれも文化施設と人々の日常生活を近づける仕組みが見られます。

KEY INSIGHT 施設の魅力を企画展や展示の充実度だけで評価せず、「訪れる理由の多さ」「滞在の自由度」「文化と接する偶然の入口」に注目します。

本レポートで見る3つの視点

府中市 自然・歴史・遊び・プラネタリウムを、ひとつのフィールドに重ねる

川崎市 生田緑地の散策動線に、無料展示・科学体験・カフェをつなぐ

八王子市 公園・図書館・交流・文化施設を、生活圏の共通拠点に集める

PUBLIC / CULTURAL FIELD

自治体・文化施設の企画運営、公共サービスの改善、市民利用・再訪施策を検討する方

BUSINESS / DEVELOPMENT

施設運営・利用者体験・地域連携・DX・事業開発に携わる方

※ 現地視察と掲載記事を基に再編集。数値・料金・施設情報は原稿記事に記載された時点のものです。観察による所感と運営効果の実績は区別して記載しています。

3つのケースから読む、 日常利用とミュージアムの接点

CASE 01	府中市郷土の森博物館	フィールド全体に、訪れる理由をつくる	04
CASE 02	かわさき宙と緑の科学館	公園での休憩から、学習体験につなぐ	07
CASE 03	桑都の杜	公共サービスの複合化と、新しい郷土博物館	10

Executive Summary

- 01 「博物館へ行く」以外の理由を用意する** 花・散歩・遊び・読書・カフェ・イベントなど、日常の用事が来訪の入口になる。
- 02 無料・低額利用で立ち寄りやすくする** 入り口の負担を抑え、興味に応じて展示・プラネタリウム等の体験へ広げる。
- 03 学びを来訪目的に限定しない** 自然や休憩を楽しむ過程で、地域の歴史・科学・文化との偶然の接点が生まれる。
- 04 施設単体でなく周辺環境と一体で捉える** 敷地内の多機能化、緑地内の施設連携、複合公共施設という3つのモデルを比較する。
- 05 にぎわいと文化的成果は分けて検証する** 来訪・滞在だけでなく、文化参加、再訪、運営コスト、平常日の利用状況を追う。

府中市郷土の森博物館 敷地全体を、利用できる博物館に

歴史資料だけではなく、自然と生活文化そのものを学びの対象にする



園内の建築、自然、花、地域文化を紹介する記事掲載写真 / 写真・構成：ArtTech Consulting

KEY INSIGHT 建物内の展示を目的地とするのではなく、自然・歴史建築・遊び・天体体験を一体に置き、何度も利用できる理由をつくっています。

約14ha

フィールド全体を博物館として構成

300円

大人入場料

約31万人

2024年度の入場者数

「府中の縮図」を歩いて理解する

1968年設立の府中市立郷土館を前身に、1987年に現在地で開館。府中崖線を意識した園内に旧役場・学校・商家・農家などの歴史建築、梅園、田畑、雑木林、水遊びの池、プラネタリウムが置かれています。

展示室で地形・歴史を知り、その後で建物や園内を実際に歩く。「展示を見る」と「地域を歩く」が連続するフィールドミュージアムです。

SOURCE ArtTech Consulting 「普段使いに使えるミュージアム「府中市郷土の森博物館」」 [原稿記事を読む](#)

花を見に来る、散歩する、休憩する。 利用目的を一つに固定しない

展示を見ない人にも滞在価値がある仕組み



9月の園内に広がる曼珠沙華 / 写真・構成：ArtTech Consulting

来館者に「目的の自由度」がある

現地では、曼珠沙華の鑑賞や撮影、写生、昼食、ソフトクリームを食べながらの休憩、小学生の団体など、さまざまな過ごし方を確認できました。訪問日にはキッチンカーや猿芸もあり、必ずしも歴史展示が来訪の主目的ではありません。

高額な企画展以外の来訪理由

「天気が良いから歩く」「季節の花を見る」「子どもを連れて出かける」といった動機でも利用できる仕組みが、多様な世代との接点を生みます。駅から徒歩約20分、入場料300円という条件下でも、平日に幅広い利用が見られました。

KEY INSIGHT 「展示を見に来てもらう」の前に、「文化のある場所を使ってもらう」。その余白が文化施設と日常を近づけています。

花・自然	散歩・写真	遊び・食事	歴史との出会い	再訪の理由
------	-------	-------	---------	-------

楽しみの延長線上に、 地域の歴史を学ぶ機会を配置する

「入口は広く、学びは深く」を一か所に組み込む



移築・復元された歴史的建築物 / 写真・構成：ArtTech Consulting

歴史展示は「しっかり学べる」

常設展示は2014年にリニューアルされ、くらやみ祭、武蔵国府、甲州街道の宿場町、地形と湧水などを時系列に紹介。ジオラマ・実物資料・映像も使われています。原稿の視察時には学芸員解説に3人が参加し、説明から展示の背景理解が深まったと記録しています。

別の目的から学びへ

大人600円で鑑賞したプラネタリウムは、展示以外の動機にもなります。花を見に来た人が古い建物を目にする、プラネタリウムを見た家族が常設展示を見るなど、複数の体験の間に学習の入口があります。

原稿から読み取れる設計上の特徴

季節性のある自然体験と、継続して利用できる歴史学習・プラネタリウムが共存。来訪の「きっかけ」と、文化を知る「深さ」を一つの施設に内包しています。

SOURCE ArtTech Consulting 「普段使いに使えるミュージアム「府中市郷土の森博物館」」 [原稿記事を読む](#)

かわさき宙と緑の科学館 散策の途中で立ち寄る科学館

自然の中で休憩と学習を組み合わせる



生田緑地の自然に囲まれた科学館 / 写真・構成：ArtTech Consulting

KEY INSIGHT 科学館単体の強い集客力より、生田緑地を訪れた人が休憩し、自然や科学と接する「立ち寄りやすさ」に特徴があります。

無料

常設展示・入館

400円

プラネタリウム一般

約24.5万人

2024年度入館者数

自然科学を、身近な公園の体験の一部に

正式名称は川崎市青少年科学館。1971年の開館を経て、2012年に全面リニューアル。川崎の地層・植物・昆虫・鳥・動物・多摩川など、地域の自然を主題に展示しています。科学館の周囲には里山の雑木林、湧水、散策路があります。

SOURCE ArtTech Consulting 「生田緑地の休憩スポット「かわさき宙と緑の科学館」」 [原稿記事を読む](#)

無料展示、科学体験、星空、カフェ。 小さな体験を選べる設計

科学館単体の展示充実度と、公園内サービスとしての価値は別軸で評価する



子どもが参加できるサイエンスワークショップ / 写真・構成：ArtTech Consulting

科学に触れるハードルを下げる

常設展示と入館は無料で、訪問時には小学生向けの講義や無料の科学ワークショップも見られました。散歩や親子での外出の途中、少しの時間だけ利用することができます。

プラネタリウムと実際の空

プラネタリウムは一般400円。光学式とデジタル映像を融合する「MEGASTAR-III FUSION」を導入。3階のアストロテラスでは太陽・星の観測へと体験が繋がります。

休憩そのものにも価値がある

館内の「Cafe星めぐり」は散策や学習の合間に使え、テラス席では犬連れの利用者也確認できました。科学館だけを目的に訪れていない公園利用者也、休憩や飲食を入口に滞在できます。

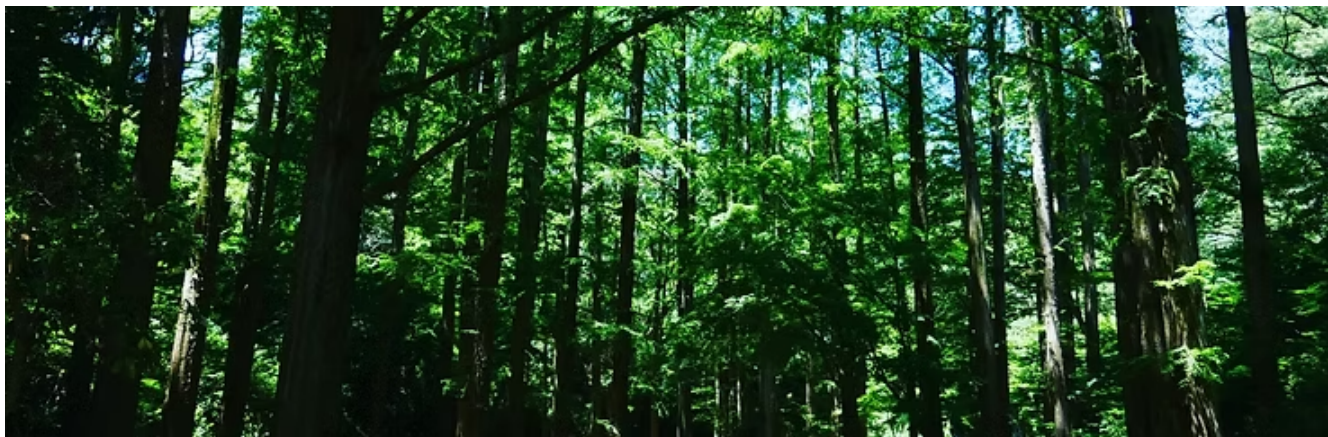


現地で利用したカフェ / 写真・構成：ArtTech Consulting

KEY INSIGHT 無料の入口に加え、低額の選択制サービスや休憩機能を組み合わせることで、さまざまな滞在時間と利用動機を受け止めます。

生田緑地全体を、 一つの野外博物館として見る

施設の価値を周辺の回遊体験と合わせて判断する



生田緑地の雑木林・里山的な自然 / 写真・構成：ArtTech Consulting

自然・歴史・アート・科学を歩いて巡る

生田緑地内には、かわさき宙と緑の科学館のほか、日本民家園、岡本太郎美術館があります。各施設は異なる役割を持ち、自然の中に配置されています。里山を歩き、科学を学び、気が向けば美術や民俗文化に触れることができます。

主役は施設ではなく、その日の過ごし方

原稿では、科学館単体が遠方から何度も訪れる強力な目的地とは感じなかった一方、生田緑地の一部としては、休憩・学び・体験を気軽に組み合わせられる設計を評価しています。施設間の回遊効果そのものは調査数値を持っていません。

里山の散策	科学館・休憩	自然科学	民家園・美術館	学びの広がり
-------	--------	------	---------	--------

KEY INSIGHT 「公園の中に独立施設が点在している」のではなく、緑地を共通の基盤として複数の文化・学習機会が繋がっています。

SOURCE ArtTech Consulting 「生田緑地の休憩スポット「かわさき宙と緑の科学館」」 [原稿記事を読む](#)

桑都の杜

公園を中心にした、新しい公共拠点

評価は開館初日の現地視察に基づく。平常時の成果は未確認



開館初日の施設全景と公園 / 写真・構成：ArtTech Consulting

KEY INSIGHT ミュージアムを独立した目的地ではなく、公園・図書館・交流・飲食・防災などの公共サービスの一つとして位置づけています。

2026.10.03

開館・現地訪問日

約5.2ha

敷地面積

約3.5万冊

いこいライブラリ蔵書

旧八王子医療刑務所の跡地を活用

JR八王子駅南口から徒歩約10分。2018年に移転した八王子医療刑務所の跡地を活用し、「学び・交流・防災」を備えたサードプレイスとして整備されました。「桑都」は、織物産業で栄えた八王子の呼称に由来します。

SOURCE ArtTech Consulting 「公園・図書館・文化施設が一体となった「桑都の杜」」 [原稿記事を読む](#)

遊ぶ、読む、つくる、休む。 家族の一日を受け止める公共サービス

文化体験を選択肢の一つに置く複合型施設



広場・ライブラリ・舞台など多様な施設 / 写真・構成：ArtTech Consulting

八王子中央公園	芝生、8つの小山、遊具、屋上の展望広場、水遊び、災害時の避難機能（約7,000人）
いこいライブラリ	約3万5千冊、読書・自習・親子のスペース、有料席（1人席100円/時、個室200円/時）
歴史・郷土ミュージアム	常設展示、特別展、公開収蔵、歴史ライブラリ、ものづくり体験、杜の舞台
SPOT HACHIOJI	市民活動向けセミナー室、スタジオ、交流ラウンジ、活動を支えるコーディネーター
飲食・休憩	カフェ、レストラン、休憩スペース。日常とイベント利用に対応

開館初日には家族連れが多く、芝生・遊具・読書・体験空間などを幅広く利用していました。公園や図書館が主目的でも、その延長でミュージアムに触れる可能性があります。ただし、この観察だけで通常時の利用状況までは判断できません。

KEY INSIGHT 文化施設への来訪を強制せず、「今日は公園だけ」「今日は本を読む」といった自由な利用を受け入れる設計です。

展示だけでは測れない評価と、 これから問われる運営成果

大規模な整備投資そのものを、成果と同一視しない



伝統産業とものづくり体験の様子 / 写真・構成：ArtTech Consulting

展示内容への評価は分かれる

常設展示（一般300円）は縄文・八王子城・宿場町・千人同心・織物産業などを幅広く紹介。原稿では資料の充実度を評価する一方、展示手法の新鮮さや再訪性には限定的な感想でした。開館記念特別展（常設を含め一般800円）についても、追加料金に見合う満足度を十分感じなかったと記録しています。

体験・市民活動への広がり

機織り等の体験に加え、3Dプリンタ・レーザーカッターなどの設備、伝統芸能を上演できる「杜の舞台」を備えています。展示の鑑賞だけでなく、制作・発表・参加へ広げる余地があります。開館初日には体験スペースが親子連れでにぎわっていました。

運営スキームと今後の論点

整備にはPFIのBTO方式を採用。2025年12月変更後の事業契約額は約192.3億円で、**建設費だけでなく設計・解体・維持管理・運営などを含む契約額**です。契約期間は2041年9月まで。平常日の利用、文化プログラム参加、運営費、静かな利用とイベントの両立を継続検証する必要があります。

SOURCE ArtTech Consulting 「公園・図書館・文化施設が一体となった「桑都の杜」」 [原稿記事を読む](#)

3施設の違いを整理する 「普段使い」の3つのモデル

比較軸	府中市郷土の森博物館	かわさき宙と緑の科学館	桑都の杜
中心となる利用動機	花・散策・歴史建築・行楽	里山散策・休憩・親子の外出	公園・図書館・交流・遊び
文化の置き方	一つの敷地に多機能を内包	緑地に独立した文化施設を配置	異なる公共サービスを複合化
文化への入口	自然から歴史展示・建築へ	散策から科学・民俗・美術へ	公園や読書から郷土史・体験へ
主な料金	大人入場300円、 プラネタリウム600円	入館無料、 プラネタリウム一般400円	公園等は無料、 常設展示一般300円
現地で見た利用の様子	花・写生・写真・休憩・学校利用	散策途中の立ち寄り・体験・飲食	開館初日の親子・公園・体験利用
考察・課題	多様な来館理由が文化接点を増やす	施設間回遊・学習への波及を検証	平常日利用・再訪・費用対効果を検証

共通する体験の流れ（分析フレーム）

① 来る 自然・遊び・読書	② 過ごす 散歩・休憩・飲食	③ 出会う 歴史・科学・芸術	④ 深める 展示・体験・対話	⑤ また来る 季節・生活・行事
------------------	-------------------	-------------------	-------------------	--------------------

KEY INSIGHT 3事例の共通項は「先に文化への関心を求めない」ことです。一方、来場動機から実際に文化的な学習や再訪へつながったかどうかは、別途検証が必要です。

※ 比較は原稿記事・現地観察を再構成したもの。利用目的・連携成果・再訪率を計測した調査ではありません。

3つの事例から考える、 普段使いの5つの設計原則

「にぎわい」と「学び」は両立し得るが、同じ指標では測れない

- 01** **まず「日常の来訪理由」を用意する** 散歩、花、遊び、読書、休憩など、展示への関心がなくても来る意味をつくる。
- 02** **入口の負担を低くし、選択肢を増やす** 無料・低額の空間を基盤とし、展示・体験・プラネタリウム等を自由に選べるようにする。
- 03** **鑑賞の前後に「過ごす時間」を設計する** 休憩・飲食・親子の滞在・屋外空間を文化体験と切り離さない。
- 04** **地域固有の文化資産につながる導線を残す** 利用の多様化だけで終わらず、歴史・自然・芸術の理解や参加へつなげる。
- 05** **運営負担と平常日の実態まで評価する** イベントの集客や開館直後の混雑だけで成功と判断せず、継続性と公共的成果を確認する。

検証したい指標の例 / 提案・分析フレーム

日常利用

平常日来訪者、年齢層、短時間利用、利用目的

文化との接点

展示入場率、体験参加、施設間回遊、学習満足度

継続性

再訪率、地域住民利用、維持管理コスト、運営人員

ArtTech Consultingの視点では、利用者の動線把握、イベント参加や再訪の計測、施設間の情報提供などにIT・デジタル活用可能性があります。ただし「**技術を導入すること**」自体を目的にせず、文化的成果と利用者体験に結びつけることが重要です。

KEY INSIGHT 日常生活に文化が溶け込む設計と、公共サービスとしての成果を継続的に検証する運営をセットで考える。

ArtTech Consulting

IT・事業開発・アートの視点を組み合わせ、 曖昧な課題を実行可能な企画へ。

ArtTech Consultingは、ITビジネス、プロジェクト推進、事業企画の実務経験と、アート・文化施設・地域に関するリサーチを組み合わせ、企業や文化領域の新しい取り組みを「構想から実行」へつなげるコンサルティング活動を行っています。

IT CONSULTING	ARTTECH CONSULTING
IT営業戦略・提案資料 新規事業／ITサービス企画 PM・PMO・要件整理 プロジェクト改善・実行支援	アート・文化事業の企画 文化施設のIT／AI活用 地域連携・顧客体験設計 IT × アートの新規サービス

Museum / Cultural Field

国内外の美術館・博物館・科学館・文化施設について、現地調査、来館者体験、教育・交流、地域回遊、文化施設DX、サービス設計などをテーマに継続的な研究と情報発信を行っています。

ご相談テーマの例

文化施設のDX構想／日常利用・再訪の設計／展示・体験の導線改善／地域連携／来館者行動の可視化／企画書・事業計画の整理

CONTACT

お問い合わせ・詳細はWebサイトから

www.arttech-consulting.com ↗

ブログ「ミュージアム研究」などを継続更新しています。



© 2026 ArtTech Consulting. 本資料は情報提供を目的とした独自レポートです。掲載写真の無断転載はご遠慮ください。